

# 視点 オピニオン21

世界各地から、肉、魚、野菜等あらゆる分野の食品、食材が輸入される食卓に上る。しかもグルメ食品や珍味と呼ばれている物だけではなく、この日常の食生活の中に違和感なくおさまっています。農家も例外ではありません。

また、国内の生産現場では、食肉生産のもととなるえさは、輸入飼料が大半を占めています。野菜でも有機質肥料を作った

## 子供よ、生きた自然と遊べ

め、材料として、骨粉、血粉、カニ殻など、輸入物が良質で低価格とあったことで、主に使われており、さらに、有機物を発酵、分解させる発酵菌も、外国産の菌が使われていることも、めずらしくありません。食の豊かさを追い求め、低コストを追求した結果、このよきな現実がつけり出されてきたのです。

### 安全性を手放す

では、国内の農業をどうするかという観点とは別に、輸入でまかえられている食卓が、消費者にどんなことをもたらしているか考え

た時、この一年は、いやおうなしにその答えをつきつけられた年になったと思います。食の安全性に大きな不安をいだかせる事件が続きました。狂牛病、O157、マスコミにより情報はあふれていますが、原因、感染経路が不明という点で、実際は不安だけが先行してしまい、危険を回避し、安全、安心を得ることはできなかつたと思います。

生水を飲んでも安全、野菜や果実の丸かじり、魚・肉を生食できる安全な国だった日本。しかし、今日本人は豊かさをひきかえに、

### 農業

こぼやし 小林 信哉  
信哉 板倉町

では、もう一度安全を手にするには、どういった手段が考えられるだろうか。輸入業者、防疫関係機関、医療機関は、地球規模で物や人が移動していることを再認識し、より安全性を重視しなければならぬと思います。

しかし、日本の現状は『国際化の波』にのみまかれています。食品・物・人間はいろいろな物を伝播する役を行います。菌・種子・昆虫などは、適した環境を得れば、生命活動を活発に行い始めます。そして、侵入を水際で食い止める

には、限界があることを冷静に受けとめることが必要だと思えます。かと言って、侵入者たちを100%死滅させることにも限界がありますし、無菌の状態を求めることに大きな落とし穴があります。学生時代に、バイオテクノロジーの実験中、無菌状態の試験管の中に混入した雑菌の繁殖力のおう盛さに、がく然としたことを思い出します。自然界では、無菌の状態が最も不安定な状態であり、最も危険な状態なのです。

### むしろ異物を体内に

私は、人間が自然に歩み寄り、近づいていくことが、一番大切なことだと思えます。緑に触れ、落ち葉に触れ、動物に触れる。そこには無数の微生物、カビ、ウイルス、有機・無機物などが宙に舞っています。体にとっては異物ですが、それらを子供のころから体内に入れることが、健康に生きるために必要な抵抗力、免疫力を高めることにつながると思えます。日本の子供たちが、国際化の波を乗り越え、世界を駆け回るためにも生きた自然と遊んでほしいと思えます。



館林高校 卒。千葉大園芸学部園芸学科聴講。日本園芸生産研究所研究生。現在、遊穂自然農法園代表として、稲の減農薬無化学肥料栽培、キヌウリの減農薬有機栽培を行っている。

在、遊穂自然農法園代表として、稲の減農薬無化学肥料栽培、キヌウリの減農薬有機栽培を行っている。

# 視点 オピニオン21

新年早々、高知県の橋本知事が、米生産調整(減反)政策について批判したことが、大きくマスコミで取り上げられました。米政策関連については、昨年十一月に平成九年度産の米価が一・一%引き下げで決定。減反面積も前年並みで決定。米需給調整特別対策費百億円の別途交付が決定。十二月には平成八年度産の最終作況指数が発表され、群馬県は、

## 大丈夫なのか食糧政策

一一一の良で全国第三位というところでした。新食管法が施行され一年が経過、次年度の政策の決定をみての発言、それなりのインパクトはありました。しかし、農家同士の歩みかみこんだ議論は聞かれず、その後のマスコミの扱いも静かなものでした。

### むなしさと静けさ

昨年春の減反説明会を思い出します。集まった農家の人の大半は六十歳を超えている会合でした。戦後まもなくから米作りをしてきた大先輩たち、心の中には色々な思いが詰まっていたと思います。なのに新食管法が保障した「作る

自由」「売る自由」を「今さら言われてもこの気持ち強いのか、そして、言葉に反した三〇%減反の話、本当は怒り心頭のはずなのに、静かでした。その場で次の質問を町農協、農政課の職員にいたしました。全国一律三〇%の減反をしましょう。という一番の目的は？ 答え「米が余り、価格が暴落するかもしれない。次に何年くらい減反を続けるのか？」「はっきりしたことは言えない。では、単純に考え、ここに集まった人の三分の一が米作りをやめるまで続くと受けと

農業 小林 信哉  
信哉 板倉町高嶋

ていいのか？」「無言。日本の食糧政策のビジョンを聞かせてほしい。」「返答なし」。質問を終え残ったのは、むなしさと静けさ。農家にはこの説明会が直接、米政策に意見を言う機会はありませんでした。そこには、これらの稲作をどうするのか、日本の食糧政策はどうあるべきか、語ろうという雰囲気はなく、選択肢の一つである減反を職務上積極的に進めている、職員姿があるだけでした。

### 消費者と向きあえ

米が現在余っているのは事実でしょう。米価の暴落を防ぐのも政策の一つでしょう。しかし、長期

の減反政策・突然の自由化・新食管法下の自主的減反政策、その間に就農者の四六%が六十五歳以上になり、五年前から一万戸、二万人の人たちが農業をやめていきました(関東農政局群馬統計情報事務所調査)。

米に情熱をかたむける若者は育つたのでしょうか。現状は想像以上に生産意欲は落ち、若い経営者の米離れが進んでいます。米の関税が予想される二〇〇一年まであと四年です。国の食糧をだれが生産するのか、安定供給体制は確立できるのか、実のある政策の実行と、そのための議論が必要で、そして今、生産者に必要なのは、新食管法が認めた「作る自由、売る自由」を最大限活用し、消費者と向きあえ、生産者の相手は国ではなく、消費者だということを認識することです。そこに展望が開けるのだと思います。

昨年は豊作の年でした。一昨年より収穫量も多しと大多数の人は思うでしょう。ところが、生産者の減少と減反で、県内では一昨年より七千二百トも減収だそうです。消費者も言葉にまどわされず、地に足をつけ、自分たちの食糧政策に、言葉を発していただきたいと思えます。



館林高校 卒。千葉大園芸学部園芸学科聴講。日本園芸生産研究所研究生。現在、遊穂自然農法園代表として、稲の減農薬無化学肥料栽培、キヌウリの減農薬有機栽培を行っている。

在、遊穂自然農法園代表として、稲の減農薬無化学肥料栽培、キヌウリの減農薬有機栽培を行っている。